

●350点所蔵し活動盛ん

文教の町・高鍋に町美術館が誕生して三年半。小さな町の挑戦に、当初は設立をめぐるいろいろな論議もあったが、今では積極的に企画展を開催するなど、文化の発信拠点として町民の間にもすっかりと根を下ろしている。

開館は一九九九年（平成十一年）年十一月三日。県内では県立美術館、都城市立美術館に次いで三番目、町村では初の美術館だった。高鍋城跡・舞鶴公園、町歴史総合資料館、高鍋藩家老屋敷・黒水家、明倫堂文庫を保存している町立図書館、城堀など、城下町らしいたずまいを残している一角にあり、白壁造りの外観が品格のある風情を醸し出している。

面積約千四百平方メートルの平屋。常設、企画展示室のほか、講演会、ミニコンサートなどに利用できる多目的ホール（いす二百四十二席）などを備える。現在、寄贈、寄託などによる所蔵作

品は絵画を中心に三百五十点ほどに上っており、年二回は館藏品展を開くなど、活動も活発。

企画展にも積極的に取り組んでいる。これまでの主なものは開館記念の「プチ・パリ展」「後七十年・児島虎次郎展」（平成十二年五月）、「開館一周年記念特別展・近代日本洋画の流れ―大原美術館所蔵作品に見る」（同十一月）、「開館三周年記念・棟方志功展」（同十四年十一月）など。いずれも美術館が独自に企画、町内外にその存在感を高めた。

高鍋町は旧高鍋藩主・秋月氏の三万石の城下町。秋月氏は漢の高祖（前二〇二―前一九五年）の末えいと伝えられ、高祖の子孫が魏（ぎ）の乱を避けて古代の日本に帰化、漢の文化を伝えた。後の太宰府官・大蔵氏がその系統で、平安時代以来、筑前国・秋月（福岡県甘木市）を拠点として勢力を張った。豊臣秀吉の九州平定の

とき、高鍋領をあてがわれ、藩主として明治時代まで治めた。

高鍋藩は多くの名君を輩出した。その代表が江戸時代後半の七代・種茂公と、その弟・上杉鷹山公である。種茂公は藩校・明倫堂を創設、教育の充実を図り、文教の町・高鍋の基礎を築いた。鷹山公は米沢藩に迎えられ、歴史に名を残した。

そんな歴史の町に誕生した美術館。全国的にも町単独の美術館は珍しい。玄関には種茂公と鷹山公の像が立ち、高鍋らしさを演出している。企画展などには宮崎市など町外からの鑑賞者が多い。

金丸通夫



白壁造りが映える美術館。町は「心の発信基地」に位置付ける